

第七回「いのちの授業」大賞 受賞一覧

【大賞（知事賞）】 作品名 はじめてのカブト虫のしいく

筆者 二瀬元 佑樹 平塚市立みずほ小学校 二年

授業実践者 二瀬元 秀一 保護者

【教育委員会賞】 作品名 カンタータ「土の歌」を学び、

「いのち」について考えたこと

筆者 増岡 有紗 神奈川県立港北高等学校 二年

授業実践者 山本 良子 神奈川県立港北高等学校 教諭

【神奈川県新聞社賞】 作品名 いのちについて

筆者 八木 幸芽 神奈川県立津久井高等学校 二年

授業実践者 林 睦 神奈川県立津久井高等学校 総括教諭

【テレビ神奈川賞】 作品名 いのちの授業

筆者 黒沢 竜輝 藤沢市立俣野小学校 六年

授業実践者 黒沢 加奈 保護者

【神奈川県PTA協議会会長賞】 作品名 いのちの授業

筆者 早田 美鳳 関東学院六浦小学校 五年

授業実践者 山本 洋美 関東学院大学看護学部准教授

関東学院大学看護学部サークルLOB～Life of baby 学生
関東学院大学看護学部母性看護学領域教員一同

5

4

3

2

1

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】 作品名 誰もが楽しめる箱根を願って

筆者

授業実践者

邑井 若菜
神奈川県立吉田島高等学校 三年
中戸川 啓二
神奈川県立吉田島高等学校 校長

【優秀賞】 作品名

筆者

授業実践者

ともに生きる社会かながわ憲章

林 優
開成町立文命中学校 二年

遠藤 仁一
開成町立文命中学校 校長

石飛 信彦
社会福祉法人一燈会放課後デイサービス
トウモロランド児童発達支援管理責任者

【優秀賞】 作品名

筆者

授業実践者

久光選手の話を通して

佐藤 美優
小田原市立白山中学校 三年

久光 重貴
湘南ベルマーレフットサルクラブ選手
一般社団法人 Ring Smile 代表

【優秀賞】 作品名

筆者

授業実践者

いのちについて考えた

山際 桃佳
神奈川県立津久井高等学校 二年

林 睦
神奈川県立津久井高等学校 総括教諭

【優秀賞】 作品名

筆者

授業実践者

いじめのこわさ

飯島 琉生
伊勢原市立竹園小学校 六年

和田 尚子
伊勢原市立竹園小学校 教諭

大賞(知事賞)

はじめてのカブト虫のしいく

平塚市立みずほ小学校

二年 二瀬元 佑樹

ぼくは、今年の夏、クワガタとカブト虫をかうことにしました。さいしょは、お父さんとこうえんにバッタとキリギリスをつかまえに行ったんだけど、たまたま六ぴきのクワガタがいたから、つかまえてかうことにしました。

また、べつの日には、オスのカブト虫もつかまえることができ、さらに、友だちからメスのカブト虫をもらい、ぜんぶでクワガタ六ぴき、カブト虫のオスとメス一ぴきずつかうことになりました。クワガタのおせわは、こん虫ゼリーをかえたり、こん虫マットの水のちようせいをやります。

とくに、カブト虫は一ぴきでゼリーをまい日一つたべるので、まいいかえなければならぬし、こん虫マットもどのぐらい水をやるかしらべるのがまい日なのでたいへんです。

ある日ぼくは、クワガタとカブト虫をたたかかせて、カブト虫がひどいケガをしてしまいました。ケガをしたときは、かなしかつたし、じぶんがわるいと思い、はんせいしました。

だけど、そのカブト虫がたまごをうんでくれました。ビックリ

したし、うれしかったです。

たまごは、すぐデリケートだから、ちよつとしたことでふかしないので、大せつにあつかわれないといけません。

これからは、ストレスがたまらないように、いつもいじょうにしくボックスをきれいにしたり、たたかかせてひどいケガをさせないように、大せつにそだてたいです。

たまごもせい虫になって、ケガをしないよう大せつにそだてて、一ぴきでも長生きしてほしいと思います。

「いのちはかんたんなものじゃない、大きくても小さくても、おなじく大せつなものだよ。」

と、お父さんに教えてもらいました。

まい日、おせわは大へんだけど、クワガタになった気もちで考えたり、そだて方をべんきようしたいと思います。

教育委員会賞

カンタータ「土の歌」を学び、

「いのち」について考えたこと

神奈川県立港北高等学校

二年 増岡 有紗

戦争、大きな自然災害。このようなニュースを見たとき、私は「いのち」について考えさせられます。私達が普段あまり身近にふれることのない「いのち」。前述のように新聞やテレビなどでふれることはあっても、平和な日本に生きる私は、それを遠いどこかの話のように感じてしまいます。

そんな日本が戦争をやったことを確かに感じさせ、現在にその悲惨さや辛さを教え、「いのち」について改めて考えさせるのが「土の歌」だと思います。この平和は元からあったものではなく、苦悩や葛藤の末に生まれたのだと思います。

「土の歌」を鑑賞したとき、とても皮肉が込められた歌だな、と思いました。同時に、だからこそこれが本音なのかな、とも思いました。作者が戦争中、軍人を鼓舞するような歌を書かされ、それ故に戦後批判された事実を知り、作者がどんどん追い込まれていくのが目に浮かぶようでした。

しかし、終章の「大地讃頌」では、自分のような人がこれ以

上生まれなような平和が祈られていました。そのことに感銘を受けると共に、もっと「いのち」について考えようと決意させる何かを感じました。

今も生まれては消えていく小さく尊い「いのち」。カンタータ「土の歌」を聴き、深い意味を知った今でも、身近なものは考えられません。しかし、それでも遠いものだからと思考を放棄せず、遠く感じるなら遠く感じるなりに「平和」や「いのち」について考えていこうと思いました。

神奈川新聞社賞

いのちについて

神奈川県立津久井高等学校

二年 八木 幸芽

私は、学校の授業で一本の映画を観ました。余命宣告を受けた一人の男性が終末期に向けたプランを立てるといった内容でした。

この映画を観て、私のことをかわいがってくれた曾祖父母のことを思い出しました。曾祖母は私が小学校六年生の時に、曾祖父は昨年亡くなりました。

曾祖母は映画で観た男性と同じくガンを宣告されていました。当時、小学校六年生だった私は、人が亡くなることがどのようなことなのか、命の尊さを考えるには幼く、曾祖母が亡くなったことにただ寂しいという気持ちがあるだけでした。曾祖母が亡くなった日を境に曾祖父の健康状態は不安定になり、支援が必要になりました。命の重みなどわからなかった私は、その時初めて人が亡くなることが周囲に与える影響の大きさ、人が亡くなるということの重みを知りました。

映画の中では、終末期へ向けて様々な段取りを本人がすすめていきます。この男性のように、自分の想いを冷静に残すこと

はできないと思いますが、自分の大好きな家族のため、お世話になった人たちのために、自分の気持ちを残したいと思いました。

私は今、福祉を学んでいます。実習先などで高齢者の方と接することが多くあります。高齢者の方々と接していく中では「終末期ケア」というものがあります。私が介護職として働くとき、曾祖父母の死が教えてくれた命の尊さ、映画で感じた想いを大切にし、利用者の命と向き合える人になりたいと思っています。また亡くなった方々だけでなく、家族に対するケアの大切さも感じています。家族の死を乗り越えて、家族も前を向いて歩きだせるように支援できる介護福祉士になりたいと思っています。

テレビ神奈川賞

いのちの授業

藤沢市立俣野小学校

六年 黒沢 竜輝

ぼくは、二〇〇七年十二月二日に産まれました。出産予定日より約三ヶ月早く産まれました。体重は六九三gしかありませんでした。産まれた時は、お母さんの片手にのるぐらいの大きさしかなかったそうです。それでもぼくは、産まれた瞬間、大きな声で泣いたとお母さんが言っていました。

産まれた後は保育器というものに入り、色々な治療をうけました。お母さんの母乳を直接飲めなかったのです、お母さんが母乳を凍らせて届けにきてくれたそうです。約四ヶ月間、ぼくは病院にいました。退院して家に帰ってから、体が小さく通院が多かったのです、お母さんは心配ばかりしていたと言っていました。

ぼくが初めて歩いたのも二歳四ヶ月で成長もゆっくりでした。今でも発育、発達に遅れがあるけど、お父さんとお母さんは色々なことに挑戦させてくれたり勉強も見てくれたりします。

お母さんは、超低体重児で産んでしまっって申し訳ない気持ちもあつたと言っていました、ぼくの生命力と医療に感謝して

いると言っていました。

ぼくは千葉県の病院で産まれて、大きくなってから自分の産まれた場所を見たくて、その病院まで見に行つたことがあります。赤ちゃんの時なので覚えていませんが、自分の産まれた場所を見てよかったです。

今でもぼくは、体も小さく勉強などについていくのが大変ですが、これからも命を大切にして自分らしく堂々と生きていきたいです。

神奈川県PTA協議会会長賞

いのちの授業

関東学院六浦小学校

五年 早田 美風

私は、学校の「いのちの授業」の中で、もくよく体験をしました。赤ちゃんを実際にお風呂に入れてみると、赤ちゃんを支えている時に手をすべらせないようにしたり、おゆを目や鼻の中に入れていないようにしたりと気を付ける事がたくさんあり、かんとんそうに見えてすごくむずかしかったです。

とくにむずかしかったのが、背中を洗う時の頭の支え方です。まちがった支え方をしてしまうと、赤ちゃんが苦しがり、首をしめてしまったりする事があるかもしれないのですごく気を付けました。

もくよく体験や、抱っこ体験、赤ちゃんの心ぞうの音を聞く体験は楽しかったし、すごく良い勉強になりました。

学校から帰宅し、お母さんに「いのちの授業」を学校で受けた事を伝えると、自分が産まれた時のことを色々教えてくれました。

私が産まれた時、私はとても小さい赤ちゃんだったので病院の先生と相談して他の赤ちゃんよりもミルクの回数を多くした

そうです。すぐにもどしてしまおうので少しずつ飲ませたり色々工夫しても中々体重がふえないので、お父さんやお母さん、お兄ちゃんもすごく心配したそうです。それに、産まれる前にも切迫流産になりそうだったり、切迫早産になりそうだったりしたので無事に産まれてきてくれるまでは心配だらけだったそうです。お母さんは、出産する前には血も少なかったので出産予定日の数カ月前から二日に一回病院に行き注射もしていたそうです。お母さんは注射が大嫌いなのを私は知っているので、「そんなに沢山注射をして大丈夫だったの。」とおどろいて聞いたたら、

「自分の大切な子供の為なら大丈夫だよ。」
と言っていてお母さんになるってすごいなと思いました。

私も大人になって、もしお母さんになれたら、赤ちゃんが泣いたり、元気がなかったりしたら病気じゃないかなとか色々心配したりして、すごく大変そうだけどがんばって自分の赤ちゃんを大切に育てたいと思いました。

そう思っていたら、テレビのニュースを見ていて、自分の赤ちゃんをたたいたり、ケガをさせたりする人がいる事を知りました。

私はそういうニュースをテレビで見ても今までは良く分からなくて、くわしく見ていなかったけれど「いのちの授業」を受

けてからはそういうニュースが気になったり、なぜ自分の子供にそういう事をするのかを考えたりしてすごく悲しい気持ちになっちゃいますが、そういうニュースに気が付けるようになって良かったと思います。

「いのちの授業」を受けて実際に赤ちゃんをお風呂に入れたり、赤ちゃんを育てる大変さを知れたり、自分の産まれる前や後の事を知れたり、家族の気持ちなどを知る事がたくさん出来たので良かったと思います。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

誰もが楽しめる箱根を願って

神奈川県立吉田島高等学校

三年 邑井 若菜

「ちっ！つまんねーの！」

中学校の下校中に耳に飛び込んできた観光客の言葉が、私の胸に突き刺さりました。

私は箱根町の強羅に住んでいます。

強羅の駅前はお土産を売っていたり、飲食店などがあつたりして、観光客はたくさんいますが、駅のすぐ近くにある地下通路を通ると、駅前とは全く違う雰囲気になります。住宅やホテルしかなく、閑静な別荘地なのです。駅前と住宅地の雰囲気の差があるため、観光で強羅に来ている人にとっては、つまらないと感じてしまうのだと思います。

今年の夏休み前に、校長先生のお話の中で、「ともに生きる社会かながわ憲章」のことを知り、すべての人とともに生きる社会とは、どのようなことなのか、自分なりに考えてみる機会を得ました。以前よりなんとなく考えていた、私の街のことが頭を過りました。箱根の中でも特に、箱根湯本や仙石原などは見どころが多く「観光」では強羅より魅力があります。すべて

の人に楽しんでもらうためには、観光の目玉が必要だと思っていました。しかし、通学途中などに観光に来られる方をよく意識して見ると、外国の方や、白杖を持った方、車椅子の方など、実に様々な方が観光に来られています。すべての方に箱根を楽しんでもらうために必要なことは、本当に観光の目玉となるものを作るのかなのかと、疑問が湧いてきたのです。

首都圏から近く、来年には東京オリンピック・パラリンピックを控え、外国人観光客も増えるとなると、これから先、箱根には今以上に観光客の増加が考えられます。観光の街に暮らす私にとって、訪れたすべての方に箱根を楽しんでもらいたいと考えた時、その中には、障がいのある方もいることに気がつきました。そういった方々のためにも、もっと箱根の整備を行つたほうが良いと感じたのです。

そのような視点で、箱根を見渡してみると、箱根には、点字ブロックが少なく視覚に障がいのある方々にとっては、危険なところばかりです。それと同時に箱根は、山であることから点字ブロックを置くには、難しいところや、歩道が無いところもあります。歩道が無いところや、点字ブロックが置けない場所は、あまり通らないようにしてほしいので、安全なルートが書いてある地図やアプリを作ったり、ボランティア活動などで案内をしたりなどの対策方法があります。観光客の方が怪我をし

て箱根がつまらないものにならないように自分たちの足で箱根を歩き、危険なところを調べ、それをもとに地図を作製していきたくとも思いました。また、私が環境緑地科で学んでいることを何か活かせないかと、先生に相談してみると、五感を使った観光もあるのではないかと思いつきました。例えば、駅前の花壇に香りのある花を植えて香りを楽しんでもらったり、箱根固有の「ハコネギク」などの植え付けをしたり、花の説明が書いてあるボードには点字を添えたり、今以上に箱根の観光を楽しんでもらいたいです。

そして、私の街、強羅では、観光の目玉となる「もの」を作るのではなく、「おもてなし」が最も魅力的な観光地になりたいと思いました。強羅は、静かで、緑がたくさんあり、とても落ち着く場所です。おもてなしの心を持って、観光客の方に接することで、普段の疲れを癒せるのではないかと思いました。

「箱根はどこに行っても良かった」と言ってもらいたいのです。そしてこれからもっと私自身が、より、箱根を好きになって、今以上に箱根の魅力を伝えられるそんな大人になりたいと思います。

近い将来、「わぁーなにこれ！これが箱根！」「以前と変わって観光しやすくなった」など、この言葉が、観光に訪れたすべての方から聞こえるような、そんな箱根にしていきたいです。ともに生きる社会で、誰もが楽しめる箱根を願って。

優秀賞

ともに生きる社会かながわ憲章

開成町立文命中学校

二年 林 優

私は、すごく好き嫌が多いです。好きな人は好き。嫌いな人は嫌い。出会って一ヶ月もすると、どうしても好きか嫌いか
が自分の頭の中で決まっています。私に、普通の人はいません。
誰でも好きか嫌いかを分けてしまいます。友達でも先生でも…。
でも、今日「ともに生きる社会かながわ憲章」のお話を聞いて、
好き嫌いが激しい自分に罪悪感のようなものを感じました。
「人権」、それは人々が楽しく暮らしていく為の、全員が持っている
権利。そのことは分かっていますが、自分で表現できません。

私は、「違うは悪いことじゃない」と言われた瞬間、ハッと
しました。自分は、自分の中で「当たり前」という自分勝手な
基準を作っていたのかもしれないと思いました。私の思っている
「当たり前」は、他の人には「当たり前」ではないかもしれない。
ない。

私は、自分自身の中で基準を作らず、人と接することで、自
分の友達が増え、もっとおもしろい生活が送れるんじゃないか

と思いました。

これからは、私の中での「当たり前」を解き、生活して行く
うと思います。

私達の在り方を変えてくれるこの憲章は、とても大切に素晴
らしいことだと思います。

優秀賞

久光選手の話を通して

小田原市立白山中学校

三年 佐藤 美優

私は今日の話を聞いて、とても感動しました。

がんはとても怖い病気で、辛いという印象しかありませんでした。私には、この全校道徳が始まるまで、「なんでこの選手はがんと闘いながらもフットサルを続けているんだろう。」という疑問がありました。講演を聞いて、その疑問が解決した時、私の心に久光選手の生き方が深く刻み込まれました。

「生きた証を残したい」

この言葉が心に刺さりました。私も時々「なんで生きているんだろう。」などと悩んでしまうことがあります。だけど、今できることを精一杯やって、生きていて良かったと思えるようになったらいいなと思います。

私は、がんなどの病気をテーマにしたテレビ番組を観ると、「皆を笑顔にしたい」「いままでの生活を取り戻してほしい」

「このあたりまえの時間をまた取り戻してほしい」と思います。そんなこともあり、将来は看護師として働くことを目指しています。看護師になって、一人でも多くの方が元気になるように

サポートします。

久光選手のように、たとえ病気と闘いながらも、自分のしたいことをして生きる生き方を私は見習いたいし、支えていきたいとも思います。

これからも、久光選手を応援していきます。

優秀賞

いのちについて考えた

神奈川県立津久井高等学校

二年 山際 桃佳

私には祖父がいます。ちいさい頃、夏休みに遊びに行くと一緒に遊んでくれ、勉強や豆知識を教えてくださいともいい祖父です。私が福祉の道へ進むと決めた時も一番ほめてくれました。そんな私の大好きな祖父は半年ほど前に認知症と診断されました。今度会いに行ったときに忘れられていたらどうしよう、変わっていつてしまうのか不安になりました。しかし、私が会いに行くと感じていてくれて笑顔で迎えてくれました。確かに、パーキンソンの症状でうまく立ち上がることができなくなったり、口数が減ってはいました。それでも辞書を使い様々なことを教えようとしてくれたり、家族の話をうなずきながら聞いていました。その様子を見て、祖父は何も変わっていない、苦手なことが増えただけ、私が手伝えばいいんだと思えました。

高校二年生になり、学校も忙しくなり、中々、祖父に会いに行けなくなっていました。そんな時に、学校である一本の映画を観ました。それは、ある男性が「がん告知」を受け、人生の終わりに向けての計画を立てていくドキュメンタリー映画でし

た。私はこの映画を観て家族の存在の大きさや「死」というものがどれだけ重いのかを知ることができました。私もどんなに祖父の症状が進行しても、それを受け止め、支えることのできる家族になりたいと強く思いました。祖父だけではなく、家族、友人、そしていつ最期の時が来るかわかりません。今ある「いのち」に感謝して、大切な人との時間を大切にしたいと考えています。「死」という現実を受け止めることは、今の私には難しいかもしれせん。でも、これから、利用者さんの一生を支え、いのちの尊さを知っている介護福祉士になれるようになりたいと思っています。

優秀賞

いじめのこわさ

伊勢原市立竹園小学校

六年 飯島 琉生

私は六年生の一学期に、道徳の授業でいじめについて勉強しました。いじめは、「被害者」「加害者」「傍観者」の三種類に分かれます。私は全て体験したことがあります。

被害者、つまりいじめられた人の事。私は仲間外れにされたと感じたことが今までに何度かありました。仲間外れもいじめの一つだと思います。そんな時は、悲しい気持ちになります。加害者、つまりいじめてしまった人の事。私はゲームで友達にいやがらせをしてしまったことがあります。いやがらせもいじめの一つです。友達にいやなことをしてしまっても後悔しています。

傍観者、つまり周りで見ていた人です。私は授業でいじめを見たらどうするかと聞かれ、止めたけれど自分にターゲットが回ったらいやだと思う。しかし、がんばって止めたいと答えました。そうしたら先生からは、「とても正直です。周りの人にも力を借りられると、勇気がわいてくるかもしれないね。」とアドバイスをもらいました。

いじめが原因で命を落とした人がたくさんいます。ある調査では、若者の約三割が「本気で自殺したいと考えたことがある」と答え、その原因として約五割が「学校問題」をあげていて、また、その中で最も多い原因は「いじめ」だそうです。この結果を知って私は、こんなにも多くの人が自殺したいと考えたことがあることに、とてもおどろきました。いじめはよくないものだと強く思いました。

いじめをなくすためには、一人一人が周りの人たちに思いやりをもって接することが大事だと思います。私も周りの人たちにいやな思いをさせないように気をつけます。そしていじめを見つけた時は、先生に教えてもらった通り、勇気を出して声を出してみようと思います。